眺望景と歴史的都市の構造に関する研究

1g01j094-4　宮下　真紀子※
Makiko　Miyashita

「景観を守るまちづくり」の意味を観光化や文化財保護とは別の視点から問う。
地域を認識するために、これまで土地の歴史や特産品を知ること、観光名所を訪ねることなどが当たり前になされてきたが、それだけでその町を知った、学んだことになるのだろうか。点的要素の集積でない都市の identity を確立するために景観が果たすことの出来る役割を「都市構造を読み取る」という視点から解きほどいてみたい。

Key　Words：俯瞰景、通り景、都市構造、都市のイメージ

1.　研究の背景と目的

景観法制定という後押しもあり、景観に対する取り組みはもはや一つの流行といえるほどに日本中どの自治体でも活発になってきている。貴重な自然資源や文化財の保護から始まった景観保全は、それらへの眺望の保全へと広がった。さらに駅前やまちのシンボルロードの整備と続き、一般的な市街地をどう魅力的にするかが今の景観行政の課題である。点、線、もしくは小さな面でのコントロールをこつこつと続けて、大きな面としての良好な景観形成に結びつけようとする努力は、長い時間をかけて少しずつ実を結び始めている。

しかしその一方で、そもそもなぜ景観の整備を行うのか、景観にはどのような意味があるのか、という原点の議論が置き去りにされようとしているのではないだろうか。本研究で景観と都市との関係を見直すことを目指し、景観による都市の identity の発見手法を検討する。

2.　研究の位置づけ

景観論の基礎のうち、本研究の目的に最も関係が深いものが次に挙げる二つである。

K・リンチは「都市構造がわかりやすい都市」にはそれだけで価値があることを述べ、都市のイメージをつかむ要素として、district・edge・landmark・path・node の 5 つを挙げた。これは、アメリカの大～中規模の都市においてその地域に長く暮らす人がどのように都市構造を把握しているかをインタビュー調査した研究結果などによるものである[1)]。

樋口忠彦は日本のランドスケープを水分神社・秋津州やまと・八葉蓮華・蔵風得水・隠国・神奈備山・国見山の 7 つの型に分類した。またその空間構成要素として境界・焦点/中心/目標・方向・領域の 4 種類を挙げ、古くからの日本のまち、むらの構造をマクロに説明した[2)]。

これらの研究に触れ、景観から得られる最も重要で、また基本的な情報はその都市の構造であるという見解から、私たちがどのように景観から都市構造を発見しているのかを考えることを本研究の目的とする。本研究は樋口の研究に負うところが多いが、これは 30 年前の研究であり、空間的構造の分類において対象地域が山村集落、古都に偏っているという印象を受ける。また、どのような空間構造タイプでどのような景観が得られるかということには言及しておらず、その点を本研究では多くの具体例を挙げて追及してみたい。

構造というマクロな視点で都市を見る景観としては眺望景がふさわしいと思われる。本研究では俯瞰景と通り景の 2 種類の景観を分析し、景観に描かれている都市構造を細かく拾い上げることとした。

3.　現地調査

現地調査は2004年7月から12月に以下の地域で行った。

表１　現地調査地域

所在地	都市内の歴史的地域の種類	所在地	都市内の歴史的地域の種類
北海道函館市	港町	岡山県倉敷市	商家町
青森県弘前市	武家町	広島県豊町御手洗	港町
秋田県角館町	武家町	広島県竹原市	製塩町
石川県金沢市	茶屋町	山口県萩市	武家町
岐阜県高山市	商家町	福岡県甘木市秋月	城下町
岐阜県白川村	山村集落	福岡県吉井町	在郷町
岐阜県郡上市	城下町	佐賀県有田町	製磁町
滋賀県五個荘町	農村集落	長崎県長崎市	港町
滋賀県近江八幡市	商家町	宮崎県日向市美々津	港町
兵庫県神戸市	港町	宮崎県日南市飫肥	武家町

都市構造の把握に必要な 14 要素に関するデータと、俯瞰景の視点場と眺望に関する情報を以下にまとめる。

※早稲田大学理工学部社会環境工学科景観・デザイン研究室４年

表 2　都市構造に関わる調査結果

地域	地形	古い町並	近い山	遠い山	独立峰	海	川	並木	駅	市役所	駅前大通	外周道路	碁盤の目	観光化
函館	湾に沿った港	一部	一方向	○		二面	端	○	端	中心	○		○	＋
弘前	平野	一部	なし	○	○		端・中心	○	端	中心	○			－
角館	山中の盆地	半分	二方向		○		端・中心	○	端	中心	○	○		＋
金沢	平野・台地	一部	一方向			一面	中心		端	中心	○			＋
高山	山中の盆地	一部	一方向	○			中心		中心	中心		○	○	＋
白川村	山中の盆地	全体	全方向				中心		なし	別の集落		○		＋
郡上八幡	山中の盆地	一部	全方向				中心		端	端		○	○	－
五個荘	湖沿いの平野	ほぼ全体	三方向	○			端		端	端		○	○	－
近江八幡	湖沿いの平野	一部	一方向	○	○		端		端	中心	○	○	○	±
神戸	山と海の間	一部	一方向			一面	なし	○	中心	中心	○			＋
倉敷	山と海の間	一部	一方向	○	○		中心	○	端	端	○			＋
御手洗	山と海の間	全体	一方向			二面	なし		なし	別の集落		○		－
竹原	山と海の間	一部	三方向		○	一面	中心	○	端	中心	○			－
萩	デルタ地帯	一部	三方向		○	一面	囲む		端	中心		○		＋
秋月	山中の盆地	全体	全方向				端･中心	○	なし	別の町		○		＋
吉井	平野	一部	二方向				端・中心		端	中心				－
有田	谷あい	ほぼ全体	全方向	○			中心		端	中心	○	○		＋
長崎	山に囲まれた湾	一部	二方向		○	一面	中心		中心	中心				＋
美々津	海沿い	全体	一方向			一面	端･中心	○	端	別の町		○		±
飫肥	川に囲まれた平野	ほぼ全体	二方向	○			囲む		端	別の町		○	○	＋

表 3　俯瞰景の視点場と都市規模、俯角の関係

地域	俯瞰景視点場	経路	視界	視点場標高(m)	市街標高(m)	高度差(m)	距離近(m)	距離L(m)	距離E(m)	俯角近(度)	俯角L(度)	俯角E(度)	都市規模
函館	山頂展望台	ロープウェー	○	332.5	3	329.5	900	2400	11000	20.1	7.8	1.7	大
弘前	（市役所屋上）	なし	○	46	31	15	市街が見える視点場なし						大
角館	山頂	遊歩道	○	168	55	113	500	1500	3200	12.7	4.3	2.0	小
金沢	丘陵展望台	車道	○	141	10	131		2700	8250		2.8	0.9	大
高山	山・車道	車道	△	604	570	34	100	400	1800	18.8	4.9	1.1	中
白川村	城山展望台	車道	○	545	490	55	375	375	1000	8.3	8.3	3.1	小
郡上八幡	城天守閣	遊歩道・車道	○	340	222	118	300	650	1600	21.5	10.3	4.2	小
五個荘	山・寺社	山道	△	325	105	220	800	1850	3150	15.4	6.8	3.9	小
近江八幡	城山展望台	ロープウェー	○	272	90	182	600	3000	5700	16.9	3.5	1.8	中
神戸	山・建築など	ロープウェー･遊歩道･山道	○	270	34	236	1000	3500	7500	13.3	4.3	2.0	大
倉敷	山･墓地･車道	遊歩道・車道	△	53	3	50	600	1300	3000	4.8	2.2	1.0	大
御手洗	丘（整備）	石段	○	25	0	25	70	200	900	19.7	7.1	1.6	小
竹原	寺社	石段	○	35	2	33	100	1000	1200	18.3	1.9	0.2	中
萩	ドライブコース	車道	○	372	26	346	1100	1800	4800	17.5	11.6	4.4	中
秋月	山間の橋	車道	○	160	116	44	420	650	1000	6.0	4.0	3.4	小
吉井	隣町の山頂	車道	○	150	30	120	600	900	4000	11.3	7.6	1.7	小
有田	山	山道	○	200	77	123	300	800	1850	22.3	8.6	3.2	小
長崎	山	ロープウェー･歩道	○	170	60	110	400	1950	7400	15.4	4.9	1.1	大
美々津	丘	遊歩道	△	35	15	20	200		300	5.7		5.5	小
飫肥	公園	遊歩道	○	40	19	21	200	270	1500	6.0	4.4	0.8	小

4.　眺望景に関する考察

4.1.　俯瞰景

● **俯瞰景とは**

都市構造を一挙に把握するのに最適な景観が俯瞰景であろう。周囲の町並みより高い場所に立つことで、かなりの遠くまで視界が開けることになる。俯瞰景の価値として、すべてを手に入れたような支配感、優越感といったことはよく言われるが、これは全体を一挙に把握できるという効果によると言えるのではないだろうか。展望台に登ると多くの人は知っている場所を見つけることから方角を把握し、それを頼りに未知の構造物を見つけたり、都市構造そのものを理解したりして楽しむ。それによってその都市をより理解したという感覚を得ることができるだろう。

● **俯瞰景の分析**

俯瞰景から得られる都市構造の要素として主なものは、リンチの言葉を借りればdistrict・edge・landmarkの３つである。pathやnodeの特徴はディティールに現れることが多いので、視線の位置と道の方向があっているか、よほど大規模でedgeやlandmarkの性質を持ってくるもの、俯角が大きく鳥瞰に近いもの以外は埋もれてしまって分からない場合が多い。俯瞰景から得られる要素の具体例をリンチの分類に従って以下に挙げる。

表４　俯瞰景から得られる要素

district	屋根勾配（陸屋根か、勾配屋根か）
	屋根色
	建築高
	海・湖
	田畑
	市街地の広がり・形
	人工島
edge	海岸線
	田畑と住居の境
	山の端
	道・川・線路（俯瞰景からは得られにくい）
landmark	ビル・ビル群
	大建築
	鳥居
	塔
	特徴的な山・近い山（そのものが視点場になることが多い）
	波止場
	橋
	空き地（グラウンドなど）

俯瞰景の調査事例を以下に示す。

● **郡上市八幡町**

図１　八幡町俯瞰景

四方を山に囲まれ、川を中心に小ぢんまりとまとまっている町である。視点場は城山の頂上にある天守であり、道程も整備されている。俯瞰景として十分な可視領域を持ち、納得性も高いといえる。

表５　八幡町の俯瞰景から得られる要素

district	市街地
edge	高速の高架
	吉田川
	山
landmark	新橋
	安養寺（ふもとの寺）
	八幡病院

4.2.　通り景

● **通り景と都市構造の関係**

都市での活動において、現在地から目的地へ到達しようとするとき、私たちはまず方向感覚を得ようとする。理解しやすい都市構造があるということは、この情報を得る上で非常に有利なのは明らかである。たとえば川と国道と鉄道が平行に走っている、地域の端にわかりやすい形の山がある、などを知っていれば多少道に迷っても自信を持って行動できる。反対に目標となるものがない町では、地図や案内板無しに行動することは難しく、いつも不安が伴う。都市構造がわかる通り景とはいわば天然の案内板であり、信頼できる貴重な情報といえるだろう。大都市であるほどこういった景観は得られにくいかもしれないが、一方で超高層建築がランドマークとなって役割を担っている。

● **通り景の分析**

アイレベルからの景観は、リンチの５要素を組み合わせることで分類できると考えた。以下、この方法で表現した例を挙げる。

表 6　通り景の分類

path から見える要素が特徴的な景観	
landmark	山・塔・建築・鳥居・稲荷
edge	海・港
node	橋・ロータリー
district	市街地・田・広場
要素そのものが特徴的な景観	
path	川・並木・坂道・階段・歴史建築・道幅・D/H
edge	公園・堀・山際・高架・線路
node	鍵曲・三叉路・五叉路・ロータリー
district	田・畑・広場
その他	
edge に沿った path である	川沿いの道・港沿いの道
edge が district を分ける	川・線路

通り景が都市構造を説明する事例を以下に示す。

①　岐阜県白川村

であい橋―観光拠点として巨大駐車場などを持つ地区と、世界遺産の集落を繋ぐ。

図 2　白川村であい橋

川という edge が district を分けている。さらにそれを繋ぐ橋という path を特徴的なデザインの歩道橋としたことで印象に残る景観となっている。

②　岡山県倉敷市

倉敷美観地区―倉敷市の観光拠点である。

図 3　倉敷美観地区

古い白壁の町並み、川、並木と 3 種類の特徴ある path が並んでいる。町並みから他のビルなどが見えないように景観コントロールを行い、特徴的な path の魅力を保っている。

③　北海道函館市

元町地区―函館山のふもとに古い洋館が並ぶ。

図 4　函館元町地区

坂道という path は山麓という district としての都市構造を表現しているといえる。また、突き当りの海という edge まで視界が一直線で開けている。

4.3.　俯瞰景と通り景の関係性

同じ対象を俯瞰景と通り景によって見た場合、以下のような違いを持って認識されると考える。

表 7　俯瞰景と通り景の関係性

俯瞰景	通り景
視対象の上面を見る	ある対象の横面を見る
一要素の全体を把握	一要素の部分を把握
対象場の概要を把握	対象場の詳細を把握
対象同士の関係性を把握	自分と対象の関係を把握

俯瞰景と通り景を両方体験する過程には 2 種類考えられる。ひとつは普段活動している場所を俯瞰することである。これは主に地域住民が展望台などに際したときに得られる経験である。一方、俯瞰景で見た場所を実際に歩く、という経験は初めてその土地に訪れた人、主に観光客などが味わうものである。こういった形で俯瞰景と通り景の両方を体験した場合に、もしそこに対応関係を認めることができるのならば、その土地に対する理解（＝納得性）が深まるだけでなく、感動や愛着という点でもただその土地に暮らしたり訪ねたりするよりも高い効果が得られるだろう。

2 種類の視点から同じ要素を見るという方法での都市構造の把握例を、視対象の要素によって都市のイメージの要素ごとに分類し、以下に示す。

表 8　俯瞰景と通り景の関係性—具体例

① 岡山県倉敷市—鶴形山　＜district＞

俯瞰景　山の全体を把握できる。街の中における山の位置関係がわかる。

通り景　町並みの背景としての山。山の一部分が町並みに色味を与える。

図 5　岡山県倉敷市

② 広島県豊町—瀬戸内海　＜edge＞

俯瞰景　海岸線の形状が分かる。

通り景　海が広く開け、護岸や波止場の素材感などのディティールが分かる。

図 6　広島県豊町

③ 岐阜県高山市—宮川　＜landmark＞

俯瞰景　鳥居を手がかりにそのそばの緑の軸が川であると分かる。

通り景　鳥居と並木と川を一度に見ることができる。鳥居を手がかりに自分の現在地をつかめる。

図 7　岐阜県高山市

④ 秋田県角館市—桧木内川　＜path＞

俯瞰景　川の流れの形が分かる。桜が土手にぎっしり並んでいるさまがわかる。

通り景　護岸のディティールが分かる。視界いっぱいに並木と川が広がる。

図 8　秋田県角館市

⑤ 北海道函館市—市役所前　＜node＞

俯瞰景　landmark ともなる node である函館市役所を中心に、並木が十字に伸びる。

通り景　並木がビスタを形成し、node にある市役所がアイストップになっている。

図 9　北海道函館市

4.4.　眺望景に関する考察のまとめ

これら 3 種類の都市構造の把握手法によってどの程度情報が得られるかということから、それぞれの都市の持つ特徴について大きく分類することができると考える。

俯瞰景から情報が得られやすい都市は「都市構造がわかりやすい」都市であり、通り景からの情報が得られやすい都市は、「特徴的な景観が得られやすい」都市であるといえる。どちらも景観資源として貴重なものではあるが、両方からの情報が得られる都市は「特徴的な景観を都市構造に結びつけて考えることができる」点で際立って価値が高い。

突き当たりに山が見える景観、川沿いの遊歩道、有形文化財、それぞれは点的、線的な景観資源であるが、都市構造とのかかわりが理解されれば、それは面を示す情報として認識されることになる。

5.　都市構造と景観の関係

5.1.　都市構造のモデル図化

都市構造と景観の関係を調べるに当たって、まず都市の全体像を簡潔に示すために都市のモデル図化を行う。本研究では前述の「都市のイメージ」、「景観の構造」を参考に、都市構造要素を 4 つのレイヤーに分けて考えた。

表 8　モデル図化に用いるレイヤー

地勢	山・大河川・湖・海・傾斜
市街の広がり	古い町並み・新しい市街地
軸線	鉄道・目抜き道路・中心を横切る道路・外周道路
焦点	ランドマーク

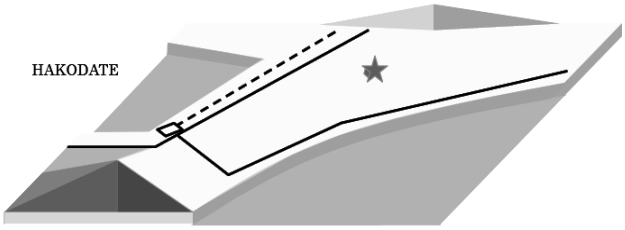

図 10　モデル図の例―函館

5.2.　都市構造の分類

描いたモデル図と表 2、表 3 を勘案して、各都市を大きく二軸上に分類した。縦軸に都市規模とし、横軸に地勢とする。横軸については中央を平野とし、右半分に関しては、右へ行くほど山がちとなる。左半分は海を持つ町であり、左へ行くほど港町としての性格を強く持つ。

さらにこの図上で近くになった地域をひとくくりにし、大きく 5 タイプに分類した。

このグループごとに共通な景観を探し、さらに下位の都市構造要素による景観の違いを考察する。

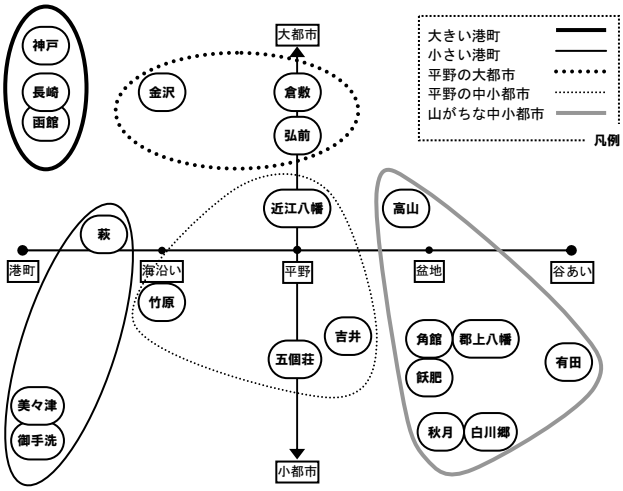

図 11　都市構造タイプ分類

5.3.　景観コントロールへの示唆

タイプ別の景観分析により、タイプごとに特に重要となる景観資源が明らかになった。これを受けて、ここでは大きい港町を例に景観コントロールへの示唆を述べる。

大きい港町の俯瞰景に共通の特徴は市街の広い範囲と海岸線を一望できる視点場をもつ点である。特に、特徴的な海岸線の形状が町を印象づけている。これを受けて、海岸沿いに建造物を建てる場合は俯瞰景を意識し、またライトアップにおいて edge の印象を壊さない、もしくは高める工夫をすると良い。これは小さい港町では海岸線よりも海そのものの景観が印象に残り、テトラポットなど岸辺の構造物が雰囲気を変えてしまうのとは対照的である。

大きい港町の通り景では、坂から海を望む景、坂から市街を望む景、橋から山を望む景、特徴的な古い町並み、並木、中華街、路面電車、象徴的な広場などの特徴的な景を持つ。これらの中で特に港町を印象づける景は坂の景である。坂から海を望む景観を持つためには、斜面が海ぎりぎりまで迫り、かつ視線をさえぎるものが無い必要があり、建築一つの配置によって簡単に失ってしまう景観であるので、これを考慮した高さ規制などのコントロールが必要となる。

6.　まとめと今後の課題

本研究は、都市の identity を発見する手がかりとなる眺望景の分析手法を探るという目的で、20 都市の現地調査を行った。俯瞰景と通り景の分析においては景同士の関係性を見出せる景を持つことが都市の identity 把握の向上につながることを述べた。

さらに都市構造の分析を合わせて、都市構造タイプによる景観の違いを述べた。最後に都市構造把握という観点からの景観コントロールにおいて、タイプごとに特に留意すべき事項を挙げた。この研究を首都圏などもっと大きな都市で適応するには更なる考察が必要だが、歴史的都市から学ぶものは多い。

また、この研究における考え方、分析手法は、住民参加型のまち学習への導入や視点場の開発提案、まちづくりの参考にする都市の抽出法として、などの活用可能性を持っていると考えられる。

参考文献

1)　K・リンチ（1968）：都市のイメージ，岩波書店
2)　樋口忠彦（1975）：景観の構造，技報堂
3)　樋口忠彦（1981）：日本の景観，春秋社
4)　文化庁文化財保護部建造物課（2000）：歴史的集落・町並みの保存　重要伝統的建造物群保存地区ガイドブック，文化庁
5)　中村良夫（1982）：風景学入門，中央公論社
6)　財団法人都市計画協会（2004）：平成 15 年度版都市計画年報